



奈良の大仏さんが造られた聖武天皇の頃のことです。久米田池の山手にある山直下村に惣平という飛脚がおりました。足が速く、真面目で正直者でしたのでなにわや堺へ手紙や荷物を運ぶ用事がある時は、みんな惣平に頼みました。

さて、卯月も終わりに近いある日のことです。惣平は今日も朝早くから身支度にかかり、葛城の山々が紺青から薄紫に変わる頃には三軒から託された用事や手紙を背に、軽やかな足取りで村を出発していました。

そしてまず、堺で二軒の用事を済ませ、なにわへ村長の手紙を届けたのは昼少し前でした。そこで持参のおにぎりを食べ、返事の書き終えるのを待ちかねて、その家を出たのは昼をだいぶ過ぎた頃でした。

そして、日が少しかける頃、やっとトロス池（取石

池―高石市）のそばまでくることができました。

トロス池は、往きと違ってゆるやかに風が水面を渡り、もやが水際から立ち上っていました。それが水門近くまで流れていくと、急に濃くなり、その中から、そのもやが人の形に固まったかのような白い着物を着た老人が現れました。その長い髪も、一文字に引かれた眉も、長いひげも真っ白で、そのうえ白い長い杖を持っていきますので、惣平には、まるで白い煙で出来た人間のように見えました。

しかし、目だけは違いました。人を射抜くような鋭い目の光は、惣平を金縛りにしてしまいました。



そして、風が枯葉を揺るような、かすれた声で、

「惣平よ。わしの手紙を、おまえの家の近くの久米田池の主に届けてくれ。久米田池の堤に立って、三回、手をたたけばすぐに池の主が現れるから、必ず手渡してくれ。きつと頼んだぞ。なお、念のため、言っておくが、この手紙は、どんなことがあっても、見るな、見せるな、誰にも言つなよ。守らなかったときはお前の命はないものと思え。」

と、厳しく言つと、滑るように近付いて、濡れた手紙を惣平の懷にねじ込み、再びもやの中へ溶けるように消えてしまいました。

惣平は、我に返り、やっとのことで、村にたどり着くと、まず一番大切な用事である村長にあてた返信を届けました。それから、まるで、自分の意志とかかわりなく、目に見えない糸で引っ張られるように、ふらふ

らと久米田池の堤までやってきました。

惣平がようやく久米田池の堤についた頃には、もうお日様が山の陰に隠れようとする頃で、空には燃えるような夕焼けが広がっていました。

そこで惣平は、もののけに取りつかれたように、懷から手紙を取り出しました。そして、手紙を高く捧げると震える声で、念仏をくり返し唱えました。

そのか細い声と手紙を捧げる様子が、あまりに、はかなげだったせいか、その時、どこからともなく一人の旅のお坊さんが現れました。そして、

「もし、その男の方、いかがなされた。困ったことがおありなら、力をお貸ししましょう。」
といました。

しかし、トロス池の老人と固い約束をしているので暗い顔をして黙って地面を見つめていますと、お坊さんは再び、

「おまえは、なにか魔物に魅入られている。このままでは命が危ないぞ。」

と、声をかけてくれました。

惣平は、そこまで親切に言ってもらったので、決心がつき、今までのことをすべて話し、見るな見せるなど、きつく言われていた手紙も見せました。

お坊さんはうなずきながら聞いていましたが、手紙を広げると、みるみる顔色が変わりました。そして、手紙に書かれている恐ろしい文を読み聞かせました。それは、

「この若者はうまそうだから、久米田池の主に贈り物としてさしあげる。すぐに食べてしまえ。」

というものでした。それを聞いて、腰を抜かした惣平に、お坊さんは、慈悲深い目を向けて、一語一語かみしめるように言いました。

「よしよし心配するな。おまえは真面目で信心深く、正

直者らしいから、わしが手紙を書き換えてやろう。」

そして、腰の矢立てから筆を出すと、近くに生えている草を集めてきつく絞り、その緑色の汁で何やら、さらさらと書き記しました。そして、惣平にそれを渡すと、夕闇迫る池の堤の向こう側にすたすたと歩いて見えなくなっていました。

残された惣平は、しばらく気が抜けたようにぼっと立っていましたが、仏様のようなお坊さんの顔を思い浮かべると、腹に力が湧いてきて、一回深く息を吸い、ゆっくりと吐き出しました。

そして、思い切って、一歩、二歩、三歩、久米田池の水に近づくと、自分の運命を託して、両手を目の高さにあげ、パンパンパンと続けざまに三回、手を打ち付けました。

すると、三回目の音が、まだ池の面に響いている間に、早くも池の真ん中あたりにさざ波が立ちはじめ、それが

渦を巻くと、その渦から立ちのぼったかのように巫女のようなあざやかな衣装の女の人が現れました。そして、渦と共に、まるで、氷の上を滑るがごとく惣平に近付いてきました。

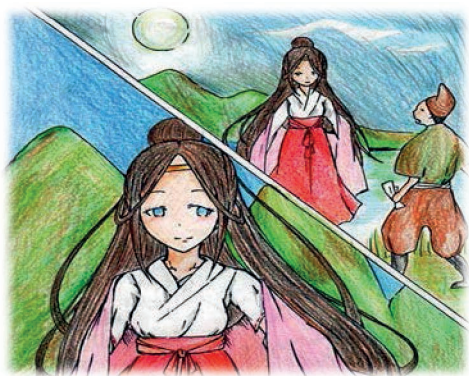
まあ、その女の人の美しいこと、からすの濡れ羽色の髪は腰まで伸びており、三日月眉の下の切れ長の目は、人の魂を吸い込むような魔力を持っていました。そして、惣平が無意識に差し出した手紙を受け取り、読み終えると、まるで、花が咲きこぼれるような笑顔を見せて、その手紙を、鈴を振るような声で読み聞かせました。

「この男は親切で働き者だ。十分もてなして、お土産もすばらしいものを持たせてやってほしい。」

と。女の人は読み終えると、やさしい声で、

「私についておいで。」

と言うと、今度は歩いて池の中に入っていました。女の人が進むと、池の水は見事に二つに割れて、通り道だ



けは濡れてもいませんでした。

惣平は、もう自分が、夢の中にいるような気分です。女の人のあとについていきました。すると、目の前には、金銀瑠璃で飾られたまばゆいばかりの宮殿がありました。

その龍宮城のような宮殿の豪華さ、そこで出されたご馳走のおいしさ、歌や踊りの楽しさ、ゆきとどいたおもてなしのすばらしさに惣平は、もう極楽にいるような心地で三日間を過ごしました。

そして、三日目の夕方、惣平は言いました。

「この三日間、言葉に表せないような楽しい時間を過ごすことが出来ました。ありがとうございました。ここでもおらせていただきます。」

のですが、私には飛脚の仕事が待っていますから、そろそろ、おいとまいたします。」

すると、女の人も、

「お名残惜しいですが、それではお別れすることにしましょう。そこで、お土産には、この美しい壺を差し上げます。この壺は、実は、宝の壺で、傾ければ、いくらでも酔が出てくるのです。どうか大切に扱ってください。ただ、いくら不思議に思っても決して壺の中をのぞいてはいけません。固く約束しましたよ。」

と、言って、また、宮殿から池の堤まで送ってくれました。

惣平は、何度も礼を言って、家の方角に向かって夢見心地で歩き始めましたが、どうも、周りの様子が三日前とはずいぶん違っているように思いました。

実は、宮殿と人間の世界では、時間の流れが異なり、宮殿の一日は、人間世界の一年にあたるのでした。

急いで家に帰ると、家族はびっくりして惣平を迎えませんでした。そして、

「まあ、三年もどこへ行っていたの。もうあんたは死んだとばかり思っていたわ。働き手のあんたがいなくなって、家は、ますます貧乏になってしまったのよ。」と、涙声で言いました。

惣平は、

「そうか、三日と思っていたのに、もう三年も経っていたのか。」

と、驚きつつ、

「でも、もう心配は要らないよ。宝の壺が手に入ったから、あすから『酔屋』を開業して貧乏とおさらばだ。」と、言いました。

それから、惣平は、酔を入れる樽を一つ買ってきました。そして、女の人からもらった壺を傾けて、樽をいっぱいにして、酔屋を始めました。

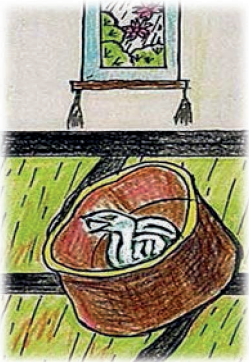


その酢は泉州一と言われるほど品質が良く、おいしかったので、評判となり、引きもきらずに客がきて、見る見るうちに大金持ちとなりました。

大金持ちとなった惣平は、大きな屋敷を建て、奥の床の間に壺を置くと誰にもさわらせず大切にしてみました。

それから数年たったある秋の夜のことです。

惣平は、奥の間で一人で静かに鈴虫の鳴き声に聞き入っていますと、サワツという音が、壺の中から聞こえてきました。そして、続いて、サワサワサワツという着物が擦れるような音がしたので、不思議に思った惣平が、思わず壺の中をのぞきますと、壺の中には全身が真っ白で、目が金色に光る小さな蛇が、とぐろを巻いておりました。そしてその時、鈴虫の鳴き声に乗って、鈴を振るような声が聞こえてきました。



「あなた、約束を破ったのぞいてしまったのね。もう私は、ここにおることが出来ません。さようなら。」

惣平は、驚きあわてて、もう一度、壺の中をのぞきましたが、もう、壺の中には、白い蛇もいませんでした。そして、壺の底には一滴の酢も残ってはいませんでした。惣平は、最後のわずかな希望を持って、壺を傾けてみましたが、もう二度と酢は出てきませんでした。

惣平は、泣く泣く、その壺を持って、村外れの、周り三丁ほどの小さな池（現在の岡山町）に投げ入れ、強い後悔と、そして、深い感謝の気持ちを込めていつまでも、池に祈りをささげていました。

その後、この池は、不思議な酢の壺を投げ入れたというので、誰言うことなく「酢壺池」と呼ばれるようになった。

そして今も、この酢壺池は、周りの木々を水面に映して、深緑の水をたたえています。